

日々の実践や研究活動の歩みを記録化し、共有する

増田 一世（やどかり研究所 事務局長）

やどかり研究所は、会員制の研究所だ。障害を体験した当事者，研究機関，教育機関の研究者，実践家が三位一体で活動することを標榜している。実践・研修・研究を三位一体で進めようというやどかりの里の活動理念を反映する活動でもある。運営は、当事者，研究者，実践者からなる共同代表制とし、月に1回の運営委員会を中心に事業を進めている。精神保健福祉が核になっているものの、近接領域の人たちが関わり、地域づくり、政策提言等々に関心が広がりつつある。会員も多岐にわたり、全国にさまざまな立場の人が会員として登録している。

やどかり研究所報告・交流集会は、やどかり研究所の会員の年に1回の活動・研究報告の場であり、交流の場である。2001年（平成13）～2002（平成14）年度は地域精神保健・福祉研究会と隔年で開催してきたが、2004（平成16）年度からは、地域精神保健・福祉研究会をお休みしているために、毎年開催している。

やどかり研究所報告・交流集会開催にあたり、会員に対して演題募集を行い、発表者を募る。会員外の特別報告のコーナーもあり、毎年「この人の話を聞きたい」「このことをもっと学びたい」という意見を運営委員会で話し合い、報告者をお願いしている。

今回の集会開催について、運営委員会で話し合っている中で、研究所顧問である丸地信弘先生から、「この集会の記録はどうなっているのか、記録化されないのは問題なのではないか」という指摘があった。

その指摘を受け運営委員会では、やどかり研究所の活動を蓄積していく意味でも、参加できない会員との情報共有の意味でも重要と考え、「響き合う街で」の掲載が提案された。そして、本誌編集部での検討を経て、今号の全面特集となった。

日々の実践や研究活動の歩みを一旦時間を止めてまとめて、報告すること、完成されたものではなく、その途中経過であっても、その過程を共有することを大切にしている。

今回初めて2日間にわたる開催とした。十分な討議の時間が必要だと考えたからだ。結果的に盛りだくさんのプログラムとなり、もう少し時間が欲しかったという結果にもなった。そして、盛りだくさんのプログラムを限られた誌面に凝縮することになってしまったが、いずれの報告も今後の発展が期待できるものである。いずれ発展し、深められた内容でお伝えできるであろう。